

千秀だより

横浜市立千秀小学校

10月号

平成27年(2015)10月 1日



秋の日はつるべ落とし・・・から

校長 市川 幸男

小蓋山から見渡す田谷の展望が、いつの間にか黄金色に染まり、吹き抜ける風に、気持ちよさそうに稲穂が波打っております。季節のうつろいは早いもので、秋本番となって参りました。耳を澄ませば、夕暮れの中、虫の音色が気持ちよく響いて参ります。その深まり行く中、子ども達は一年の折り返し点でもある前期終了に向け、一生懸命学習に取り組んでおります。これまで保護者の皆様をはじめとして、地域の皆様方には、たくさんのご支援を頂き、まことにありがとうございました。

さて、先日、若い先生方と季節について話し合う機会があったのですが、その際、印象深いことがありましたので、紙面を借りてご紹介いたします。「秋の日はつるべ落とし・・・」とわたしが話しましたところ、一部の若い先生が、首をかしげ、不思議そうな顔をしています。気になって、「どうかしましたか?」と聞くと、「つるべ落としって何ですか?」と聞き返されました。わたしは、はっと思い、かつて縄や棒の先に結んでくくりつけた桶を使い、井戸の水を汲んでいたのですが、その桶が井戸の中に真っ逆さまに落ちていくように、秋の日は、すぐに暗くなるものですと、言葉を換えて話を続けました。その後、先ほどの「つるべ」の話題に戻り、季節を表す言葉について盛り上がったのですが、心の中では、若い人に何かを伝えていく時には、言葉を選び、分かる言葉で伝えていかなくてはいけないのだなあと思ひました。これは、年長者が言葉に優れ、若者が劣っているということではありません。逆に、若い人たちが、日常使っている言葉で話されると、私には意味不明で難解な文章となることでしょう。言葉も時代によって変化していくものだと思ひ、あらためて実感した次第です。とは言っても、伝わらないからといって、古くから使われてきた言葉を捨ててしまってもよいというものではありません。例えば秋を表す言葉にしても、「秋晴れ」「桐一葉」「小春日和」「夜長」「錦秋」・・・といった風情ある言葉が目白押しです。これらは、古くから人々が季節の中に生き、感じ、言葉に残していったものです。そしてそれは人々の共感を生み、世代を超えて伝わってきた素晴らしい言葉なのです。確かに今の時代、テレビの時代劇の中でしか「つるべ」を見かける事は無くなっています。だから若い先生方が「つるべ」を知らなくとも無理はありません。でも、つるべは知らなくとも、「つるべ落とし」という言葉や「秋の日はつるべ落とし」という慣用句などは知っていて欲しかったと思うのは、私がもう古い人間なのだからでしょうか。

今の時代、社会の中では、簡略化したカタカナ言葉が流行り、英単語が訳されもせずそのまま活用されています。アップテンポな現代の生活の中でのコミュニケーションには、時代にマッチした必要な姿と考えています。だからこそ私たち学校では、しっかりした国語に、美しい日本語により多く触れさせ、身につけていくことを大事にしたいと、夜半の月を見上げながら考える帰り道でした。

さて、文頭にも述べましたが、今月半ばには前期のまとめ。3日間のお休みを挟んで後期が始まります。折り返し点以降の、これからの半年間は、自分が立てた年度目標の実現の期間と捉えます。どの子どもも充実した一年間だったと、感想がもてるように、職員一同気を引き締めて、指導に当たりたいと思ひます。よろしくお願ひ致します。